

# 修学旅行にみる『旅』の意義 ～『自己練磨型』教育旅行の 導入・変容・そして現代的意義～

藤田 和志<sup>1</sup>・家田 仁<sup>2</sup>

<sup>1</sup>非会員 東京大学大学院 工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1)

E-mail: fujita@trip.tu-tokyo.ac.jp

<sup>2</sup>フェロー会員 東京大学大学院教授 工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1)

E-mail: idea@civil.tu-tokyo.ac.jp

本研究では旅行と教育の関係として修学旅行に焦点を当て、修学旅行に対して文部科学省が意図する「旅の人づくり効果」を探った。明治期において修学旅行に対する政府の指示が始まったころには、ドイツの修学旅行を参考にして生徒自身の判断を要求する、自主性の高い旅行を実施していた。だが1955年に修学旅行生を乗せたフェリーの転覆事故が発生し、学校や教師の管理が求められ始めると、修学旅行での生徒の自主性が失われた。しかし2002年の学習指導要領改正でゆとり教育や総合学習が始まり、教科学習にとどまらず生徒が自分で総合的に判断する能力が求められ始めた。この教育を受けた世代は、従来より旅行に出る割合が増加していた。

**Key Words :** *role of travel in education, school trips*

## 1. はじめに

### (1) 研究背景と目的

近年の交通に関する研究では、交通需要予測や、国土開発計画、都市と地方の格差問題など、交通の発達による影響に関するものが多い。だが、交通を必要とする根本的な理由や、旅に出る本質的な動機について研究された例は少ない。

さらに、近年は日本で若者の海外旅行者数が減少傾向にあることが課題となっている。旅に特別な意義と可能性があるのならば、旅行者が減っていることは日本として何らかの損失につながっていることを意味する。この損失が何であるのかを推察するために、旅の本質的意義と可能性と探ることを本研究での大きな目的とする。

田中(2012)などの先行研究によると、旅には人づくりの効果・教育的効果があることが分かっている。教育と旅と聞いて、まず思い浮かぶのは修学旅行、または林間学校・遠足なども含む教育旅行であろう。そこで本研

究では、修学旅行の目的や催行の形式などの変化、諸外国での状況などを調べ、修学旅行に求められる効果を考察する。その結果から、広く旅の意義を類推する。

### (2) 研究の方法

まず、修学旅行など法令に定義が存在する旅行について、その法令を時代ごとに調査した。文部省などの行政機関が出版した指導書も、法令と同様のものとして調査した。それらを用いて、発布・刊行当時の政府が修学旅行にどのような教育的意義を期待していたかを追跡した。また、日本修学旅行協会が学校を対象に実施した修学旅行に関するアンケートの結果も、学校が意図する修学旅行の目的などを把握するために分析した。

次に、教育旅行の起源について、文献調査やインタビュー調査を基に目的や実施方法を調べた上で、現代の修学旅行と比較した。また、その起源となる教育旅行が生まれた国が現在どのような教育旅行を実施しているかを考察した。また、日本に関しても近現代に刊行された旅

に関する記述と修学旅行も比較し、現代の若者が受けた教育と旅への動機との関連や、一部の現代の若者が実施した旅と修学旅行が有する意義の関連を考察した。

## 2. 政府文書等に見る修学旅行

### (1) 現在の学習指導要領における修学旅行

はじめに、現行の法令を分析して現在の修学旅行の意義に関する課題を探る。

学習指導要領は平成に入ってから大きく4回改定されたが、修学旅行に関する記述は平成元年の改定から変化がない。現在の学習指導要領における記述は、以下の通りである。

「平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」（中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領、第5章特別活動、旅行・集団宿泊的行事）

「自然の中での集団宿泊活動などの平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、人間関係などの集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」（小学校学習指導要領、第6章特別活動、遠足・集団宿泊的行事）

高校・中学校では「旅行」を学校行事として認めているが、小学校では「遠足」にとどまる。小学校では「自然の中での集団宿泊活動など」と具体的な実施状況が提示されているが、中学校・高校はあくまで「平素と異なる生活環境」とだけ定義される。小学校では主に林間学校や臨海学校などの野外活動を念頭に置いていると思われる。

上記の文書を要約すると、修学旅行の目的は「平素と異なる生活環境」で「望ましい体験」を得ることとなる。この文言だけでは政府が修学旅行に対して具体的に何を期待しているのかは把握しにくい。また「見聞を広め」「集団生活の在り方や公衆道徳」を学ぶのは、座学でも学ぶことはできる。修学旅行は他の行事・授業で代替されうる可能性がある。

では、修学旅行ははじめから何かに取って代わられることを意識して創設されたのだろうか。そもそも、なぜ修学旅行は日本の教育に導入されたのか。修学旅行の創設時から近年までの法令・公文書における変化を探る。

### (2) 明治期の修学旅行

#### a) 文部省刊行の『独国ノ修学旅行』に込められた意義

日本修学旅行協会発行の『修学旅行のすべて2005（平成十七年）Vol.24』に、日本の修学旅行の歴史がまとめ

られている。その中で、修学旅行に関する政府文書を探したところ、文部省が刊行した『独国ノ修学旅行』が、最も古い政府文書であることが判明した。

1886年に東京師範学校が「長途遠足」を実施して以来、日本各地で修学旅行が実施されるようになった。全国各地で違った形で修学旅行が実施されている現状を鑑み、文部省普通学務局は1900年に『独国ノ修学旅行』を刊行し、修学旅行の理念・目的を明言した上で、その具体的な実施方法を規定した。

#### ① 修学旅行の定義

まず、文部省による『独国ノ修学旅行』における修学旅行の定義は以下の通りだ。

「修学旅行トハ全校生徒ガ一人以上ノ教師ノ指揮ノ下ニ少クトモ二日（宿泊ヲナシテ）旅行シテ体育知育情育意育ニ等シク益セシムルコトヲイフ」（p.1）

複数人で数日間の旅行を経験することが、修学旅行の定義とされた。

#### ② 修学旅行の目的・意義

何を目的として学校は修学旅行を実施すべきか、『独国ノ修学旅行』において文部省は概略を示した。その目的からは、以下に挙げるとおり、広く旅の意義も推察される。

「修学旅行ハ教育ノ手段トシテ最良ノモノナリ」（p.1）

「此等変化セル地位ニ相応スル統御ノ準則ヲ設ケテ生徒ヲシテ地位ノ異ナルニ従ヒテ其レ相応ノ挙動規律ノ下ニ立タシメ多クノ行動ノ機会ヲ得シムベシ」（p.2）

「経験ニ由レバ此行動ハ学校ニ於ケルヨリハ一層熟考的、意識的ノモノトナリ」（p.2）

「生徒ノ性格上ニ直接ノ影響ヲ及ボス所ノ訓育ヲ施スベキ機会ヲ供ス」（p.2）

「道徳的人格ノ基礎ヲ為スニ主要ナル条件ハ生徒ニ行動ノ機会ヲ多ク与フルニアリトイウヲ思ヘバ修学旅行ガ訓育上即チ性格修養上ニ指趣ヲ有スルノ理自ラ明白ナルベシ」（p.3）

「行動ニ多クノ機会ヲ与フルモノハ修学旅行ニ若クモノナシ教授上ニテハ只想像的ノ行動ノミナレモ旅行ニテハ実際ノ決断ヲ施ス機会アリ」（p.3）

「教授ニテハ受ケ取ラントスル児童ノ精神ト受ケ取ラルベキ材料トガヨク結合スレバ其教授ハ愛ニ成功ヲ告クルモノトス」（p.6）

「児童ヲシテ益々受取り得ベキ能力ヲ発達シ益々観察ヲ精鋭ニシ益々其興味ヲ多方面ニ広グルヤウニナラシムルコト即チ教授ノ目的ナリ（中略）適当ナルモノハ教育的修学旅行ニ若クモノナシ」（p.6）

「経験的興味ニ関シテイヘバ旅行中児童ニ印象ヲ興フル自然界及人生上ノ現象ハ児童ガ之ヲ自己ノ有トナシ得ザル程移シ学校ニ於ケル十週間ノ授業ヨリモ一週間ノ旅

行ノ方寧ロ多ク材料ヲ供給ス」 (p.6-7)

「美的興味ヨリ見ルニ自然界及人工的美術中ニハ此興味ヲ満足セシムベキモノ数多シ」 (p.7)

「此興味ハ他ノ興味ヨリモ喚起セラルルコト難ケレドモ旅行ニ於テ始メテ之ヲ喚起スベキ機会ガ興ヘラルルナリ」 (p.7)

「他ノ方面ヨリ修学旅行ノ教授上ニ於ケル指趣ヲ見ントナラバ学校ノ教科課程ニ上レル教授ノ諸対象フォー々眼前ニ浮ベテ見ヨ此等総テノ教科ガ如何ニ修学旅行ニ依リテ大ナル利益ヲ受クルカヲ知ラン」 (p.7-8)

換言すれば、普通の教科学習の延長として旅先で実物を見ることの他、外出して生徒が普段見せない性格を現し、生徒自らに判断を求めることに修学旅行の意義を見いだしている。

また、文部省は実際の修学旅行でどのように教育を実施するのかについての参考として、旅行における具体的な状況も想定していた。

「岐路ニ臨ミテ何方ノ路ヲトルベキカ、風雨起ラントスルニ当リテ次ノ村落迄進行ヲ續クベキカ所定ノ箇所ニ達セザリシトキハ何処ニ宿泊スベキカ、河橋ガ余リニ遠隔ノ所ニアルトキハ寧ロ水ヲ渉ルベキカ等ノ所斷ハ初メテ旅行セシモノニトリテ重大ノ事柄ナリカカル場合ニ当リテ生徒ニ自ラ判断セシメ且ツ、其判断ノ理由ヲ問フベシ」 (p.3)

教員に対しても「教員ガ総テノ事ヲ処理スルカ如キハ畢竟誤ナリ、修学旅行ニ於テハ生徒自身ノ活動ヲ眼中ニオクベシ而シテ若シ生徒ガ誤リタル判断ヲナシタルトキハ教員ハ之ヲ防キ且ツ将来此誤ナカラシムルヤウニ努ムベシ」 (p.4)、「学校及公共ノ生活上ノ諸關係ヲ自由ニ生徒ト問答シテ生徒ノ意見ノ誤レルヲバ温和ニ指示シ彼等ノ意見ノ矛盾セルコト、從ヒテ持スベカラザルコト棄ツベキコトヲ生徒ガ自ラ覺ルヤウニナシテ其代リニ未来ニ於テ確固タル主義ヲ得ルニ至ルベキ諸点ヲ教示スベシ」 (p.5-6)、「カクノ如キ交際ニヨリテ教員ト生徒トハ学校ニテハ得ベカラザル接近ヲナス (中略) 進行中相伴ヒ夜ハ共ニ息ミ且ツ苦楽ヲ共ニストイフコト特ニ効果アリ」 (p.6) と生徒の判断力を尊重するように求めている。

すなわち、文部省または明治政府は修学旅行に対して、実際の物事・行事に触れる「生の体験」と生徒自身に任せる「判断力」を要請していたことが分かる。

#### b) 明治政府が参考にしたドイツでの修学旅行

当時の文部省は、特にドイツで実施されている教育旅行が日本の修学旅行にとって参考となる部分が多いとし、日本の修学旅行の計画において参考にできるようにと、『独国内ノ修学旅行』ではドイツでの修学旅行の実施例も紹介された。

中でも特に、ドイツの教育学者クリスティアン・ゴッ

トヒルフ・ザルツマンが実施した修学旅行を推していた。ザルツマンは人類への愛に基づいて利他的活動を行うドイツ汎愛派の教育家で、十数年間の牧師生活を経た後、1781年にデッサウの汎愛学校Philanthropinumに招かれて2年間宗教教師を務めた。1784年ゴータ公エルンスト2世の援助のもとにシュネップェンタールに独自の汎愛学校を設立し、終生その指導に心血を注いだ(平凡社『世界大百科事典1988年版11』p.396)。この学校でザルツマンが実施した修学旅行を参考にすると、明治政府は国内の学校に指示した。

#### ① 明治政府がザルツマンの修学旅行を推奨した理由

『独国内ノ修学旅行』には「ザルツマン氏ノ行ヒシ修学旅行ハ主要ノ点ニ於テハ既ニ今日ノ修学旅行ノナサント欲スル所ヲ尽シタリ」 (p.26) との記述が見られる。その旅行の詳細は、以下のように記録されている。

「修学旅行ノ歴史ヲ繙スレバザルツマン氏ガセネフェンタールノ学校ニテ一七八四年ヨリ一八〇三年迄ノ間ニ数度修学旅行ヲナシタリ」 (p.46-47)

「修学旅行ヲ以テ学校課業ノトヲシタルノ始メニシテ其為シ方ノ詳細ナル点ニ於テハ非難スベキ点多キモ大体上之ヲ基礎トナシテ可ナリ」 (p.47)

「氏ハ之ニ依リテ生徒ガ自然ヲ愛シ観察ノ習慣ヲ生シ旅行ヲ欲スルニ至ルヲ希望シタリ」 (p.47)

「ザルツマン氏ハ特ニ修学旅行ノ体育及徳育上ノ効果ヲ称シ日ニ照サレ雨ニ沾フハ兒童ノ身体ヲ強健ニシ而シテカクノ如ク屢々艱苦ニ耐フルトキハ其性格ヲ強固ニスルノ効アリトナセリ」 (p.48)

#### ② ザルツマンの教育方針

ザルツマンの教育思想は汎愛派を特色づける啓蒙的合理主義に貫かれており、子どもの潜在的諸能力の調和的育成による個人的幸福の実現を第一義としている(平凡社『世界大百科事典1988年版11』p.396)ため、特に生徒には自然の中で自主性を育むことを求めている。修学旅行にザルツマンは以下の三つを不可欠な事柄として定めていた。

「一、旅行ニ先チテ (ママ) 予メ地理ヲ教フルコト、即チ通過スベキ地方ヲ精密ニ知り其領域界限ヲ知り又其住民ノ職業及其土 (ママ) ノ産物等ヲ知ラシムルコト」 (p.48)

「二、旅行ニ先チテ生徒ノ衣服、履、襦袢ヲヨクヨク吟味スルコト」 (p.48)

「三、旅行ヲ秩序的ニナス準備、即チ隊伍ニ分チ各部ニ役員ヲ置キテ特殊ノ任ニ当ラシム其役員中一人ノ生徒ハ指導者、他ノ一人ハ荷物監視者、他ノ一人即チ第三人ハ其外ノ特ニ注意スベキ事物ヲ注意スル者ナルコト」 (p.48)

修学旅行を授業とは別物と捉えており、「ザルツマン氏ハ (中略) 授業ト訓練トハ別ナリトナシ修学旅行ハ訓

練ノ目的ヲ以テナスガ故ニ、児童ノ性格ヲ養成スル目的ヲ以テナスガ故ニ学校ノ課業ト必モシ（ママ）一定ノ関係ヲ有スルニ及バストセリ」（p.49）という記録もある。それだけ修学旅行でしか得られない経験があると見なし、修学旅行を特別視していたことがうかがえる。

ただし、ザルツマンの修学旅行は幾分過激なところもあった。

「ザルツマン氏ハ真理ヲ愛スルノ極往々極端ニ走り謂ヘラク人類ノ用ニ適スルモノモ地球上ニ起ル事モ悉皆人ノ回想ト人ノ活動力トヲ刺衝シテ人ニ知識ト善トヲ興フルモノナリ」（p.48-49）

「氏ハ生徒ヲ解剖室ニ導キテ人ノ屍体ヲ示シ詳シク諸器官ヲ説明セリ」（p.48）

「凡ソ觀察ニ触ルル所ノモノハ其品質其分量ヲ問ハズ皆之ヲ生徒ニ授ク為メニ生徒ハ精神昏迷シ身体疲労スルニ至レリ」（p.49）

「或修学旅行ニテ一日以内ニ（一）或ろ一まんかそりック教会ヲ訪ヒ（二）一殿堂ヲ訪ヒテ詳細ナル説明ヲナシ（三）一城塞ヲ訪ヒナドシテ遂ニ二十ヶ所ニ至レリト云フ」（p.49）

「カクノ如クナレバ児童ノ両親ガ時ニ修学旅行ノ厳酷ナルヲ訴フルハ怪ムニ足ラス」（p.49）

これらには保護者からのクレームがあったことも記録されているが、それだけ「生の体験」を重視していたことが分かる。

以上から、明治政府が修学旅行に求めていた「生の体験」「判断力」はドイツの修学旅行がモデルで、このモデルを発展させて日本の修学旅行にも『自己練磨』が採用されたと考えられる。

### c) 出版当時の文部省普通学務局長の思想

『独国ノ修学旅行』の端書きには、文部省普通学務局長であった澤柳政太郎の名前が記されているが、本書における修学旅行に関する教育政策は澤柳の実施した他の教育政策に相通ずる点が見られる。澤柳は文部官僚として、以下の政策などを実行した（新田,2006）。

普通学務局長に就任してまず、澤柳は小学校を無償化した。無償化前の小学校の授業料は、一説では現在の9000円程度と考えており、一家族が養う子どもの数を考慮に入れると家計にとって相当な負担だった。

また、後に京都帝国大学の総長に就任してからは、7人の教授に退職を勧告した。当時の大学教授は高齢で研究にも教育にも従事できない者、新聞や雑誌にお粗末な原稿を売って金銭を稼ぐ者などが多く、一部の教員・文部官僚からは憂いの声が上がっていた。大学教育の質を向上させるため、教授会の反対があつて結局澤柳はこの後総長の職を辞することになる。

いずれの政策も、当時としては革新的だった。澤柳が教育の質と機会均等を常に意識していたことが見て取れ

る。『独国ノ修学旅行』も、生徒が全国で質の高い修学旅行を等しく体験できるような体制を整えることを意識して作成された可能性が高い。

### (3) 戦後の『修学旅行の手びき』にみる修学旅行の理念の変容

#### a) 修学旅行の意義に関する言及の縮小

明治期に発生した『自己練磨』の理念だが、昭和に入ってから修学旅行における重要性が縮小した。

1956年、文部省は前年に設置した修学旅行協議会の協議を基に、学校・都道府県教育委員会向けの資料として『修学旅行の手びき』を発行した。A5判で120ページに及ぶ量がある。

修学旅行協議会は、1955年に瀬戸内海で岡山と香川を結ぶ宇高連絡船「紫雲丸」が貨物船と衝突して沈没し、四つの小中学校の修学旅行生を含む168人が犠牲となった「紫雲丸事故」を契機として、修学旅行の適正かつ安全な実施のために文部省内に任意団体として設置されたものである。

協議会の設置理由が事故対策であったがゆえに、『修学旅行の手びき』では内容のほとんどが計画・実施・事後の指導に割かれた。一方で修学旅行の教育的意義に関しては、以下に示す文面の、わずか1ページだけになっている。

#### 「1 修学旅行の教育的意義

学校の行う修学旅行の教育的効果は、いろいろな面から考えられるが、これを要約すれば次のようになる。

(a) 児童・生徒が、わが国の文化・経済・産業・政治等の重要値を直接に見聞する経験を得ることによって、教科学習や特別教育活動を拡充することができる。

(b) 旅行という生活形態を通じ、また旅行によって接触する新しい生活環境に即して、健康・安全・集団行動・道徳などについて望ましい体験を得ることができる。

(c) 旅の未知の世界を見聞し、また師弟や学友が寝食をともにすることによって、楽しい生活を味わい、生がいの思い出を作り、学校生活の印象を豊かにすることができる。

修学旅行は、周到な計画と行き届いた準備や指導のもとに行われるときは、その教育的効果はきわめて大きい。学校が修学旅行を実施する場合は、その教育的意義をじゅうぶん（ママ）に理解し、学校の教育計画の一環として取り扱い、健康と安全のための万全の策を講じ、教育的効果を高めるようにしなければならない。」（文部省,1956,p.9）

『独国ノ修学旅行』を出版した時期に比べると、修学旅行の知育・徳育といった平素の学習に関連が深い部分に関しては、直接に見聞する体験をよりいっそう活かすように求めている。しかし、それら以外の面、いわば旅

に出て初めて得られる経験については具体的な言及がほとんどない。

## b) 色あせる修学旅行

「普段の教育で味わえない体験」を実践することが、修学旅行の目的の一つと思えるが、日常と同様の安全性を備えるように忠告する一文も『修学旅行の手びき』の中に見受けられる。

「児童・生徒による非行は、けんか・万引・せっ盗・恐かつ・わいせつ行為・遊興・飲酒・喫煙・ヒロポン使用・失そうなどにわたっているが、学校における平素の生活指導と関係が深い。」(p.37-38)

「修学旅行時における以上のような事故を未然に防ぐため、学校は、日ごろの安全教育、保健衛生指導、生活指導を行っておかなければならない。特に、旅行直前においては、(中略)指導を徹底しておく。」(p.38)

1956年の文部省の考えでは、日常と同様の安全を非日常の修学旅行にも確保することに最大の関心が向けられていたものと考えることができる。

## c) 管理教育の徹底へ

『修学旅行の手びき』を見ると、国あるいは学校が児童・生徒に指示を多く与える管理教育の様相も呈してい

る。服装や旅行中の行動などにおいて、細かいと思われる程度にまで制限を加えた。生徒の自主性より、集団行動を重視している。

「最近、修学旅行時における児童・生徒の服装はしだいに華美になる傾向が見られる。学校の児童・生徒としての身分や父兄の経済的負担を考へて、質素な服装で旅行するように指導する必要がある。また旅行中は、長途の車船内生活をし、混雑の中を身軽に行動しなければならないし、不慮の事故に遭遇した場合には機敏な行動をとらなければならない。このような点を考慮すれば、軽快で堅ろうな服装が必要になる。(中略)女子の場合は、りっぱなゆかたや着物を持参し旅館で着換えて美を競ったり、夜行列車内でゆかたに着換えたりすることのないように指導する。」(p.39-40)

「文化財を見学する際に、メモをとる場合は、鉛筆を使用し、美術品等を汚損するおそれのあるペンや筆は使用を厳禁する。」(p.48)

「旅行中は、予想外の用務や突発的な出来事が多いが、引率教師は、それらに対して細心の注意を払い、あらゆる事態に対処して臨機応変の処置がとられるように心がける。特に、事故の発生に際しては、教師みずからが沈

表-1 高校における修学旅行の目的(日本修学旅行協会『修学旅行のすべて』『データブック教育旅行白書』各年度版より筆者作成)(全国の高校で、1967年は5935校、その他の年は952~1497校を対象に調査。回答の数字は%を示す)

	1967	1979	1983	1987	1993	1997	2003
地理・歴史・経済などを直接見聞し、学習を拡充	60.2	33	32	47.5	41.8	35.8	34.3
地域の文化・民俗・生活などの調査活動	-	4	3	40.1	39.6	37.8	43.2
農・山・漁村などの生活体験を通し理解を深める	-	1	0.4	1.6	1.8	0.6	2.5
国際理解・国際親善	-	-	-	1.6	10.5	12.6	10.0
スキー・登山などのスポーツ実習	-	2	2	19.5	23.5	20.7	18.5
自然の偉大さ美しさにふれ豊かな情操を育てる	12.6	10	11	49.6	47.5	50.7	48.2
集団生活のきまりや公衆道徳を体験で学ぶ	21.7	17	23	82.9	72.6	67.4	58.6
師弟や生徒相互の人間関係を深める	-	22	17	76.1	68.1	69.8	60.3
生涯を通しての楽しい思い出を作る	4.4	11	11	48.7	51.0	54.7	50.3
その他	1.1	1	0.5	4.5	8.0	13.2	17.0

表-2 中学校における修学旅行の目的(日本修学旅行協会『修学旅行のすべて』『データブック教育旅行白書』各年度版より筆者作成)(全国の中学校で、1967年は11542校、その他の年は1202~1775校を対象に調査。回答の数字は%を示す)

	1967	1980	1982	1988	1992	1998	2002
歴史学習(史跡・美術・文学などを含む)	49.5	21	24.6	25.3	22.5	22.4	20.0
地理学習(自然・人文・地質などを含む)	-	15	17.4	10.8	9.6	7.5	5.8
社会学習(産業・工場見学などを含む)	12.5	7	8.4	7.6	7.0	8.4	7.1
自然に親しみ、からだを鍛える	9.2	3	3.6	5.5	4.6	5.1	3.7
集団生活訓練(人間関係の育成)	20.1	23	31.7	31.4	30.7	29.9	28.5
生涯の思い出をのこす	6.8	31	13.0	17.5	19.5	21.0	17.1
その他	1.9	1	1.3	1.9	3.0	5.7	17.8

着・冷静な態度を持し、事態の全般を見て適確な判断を下し、迅速に適切な行動をとり、被害を少なくするようにしなければならない。」(p.46)

明治時代と異なり、文部省は児童・生徒が自ら何か新しいものに触れて臨機応変な行動を起こすことに期待することよりも、戦後の修学旅行では知識や道徳に傾注して危険な行動を阻止、教職員による管理をいっそう厳しくする方針で指示を出した。

#### (4) 日本修学旅行協会の行ったアンケート調査結果の再分析

##### a) 学校が定める修学旅行の目的に関して

日本修学旅行協会は1967年以降、実際に修学旅行を実施する学校は何を目的として修学旅行を催行したのかなどについて、日本修学旅行協会が全国の高校・中学校のうち、1967年は5935校(高校)、11542校(中学校)を、他の年では952~1497校(高校)、1202~1775校(中学校)を抽出した上で、その学校の教員を対象にアンケート調査を行っている。その変化を時系列的にまとめて分析することにより、修学旅行の目的に関するアンケート調査を用いてその変化を追跡する。結果は表-1・表-2のようになった。(質問事項は、年によって若干異なる。高校の1987年以降の数値は、複数回答によるものである。ハイフンは未調査を示す)

ここでの質問内容は、学習指導要領にある「見聞を広め」「自然や文化などに親しむ」「集団生活の在り方や公衆道徳」という目的を念頭において設定されたと思われる。例年高い選択率を占めているのは、集団生活や人間関係に関する部分であり、この傾向は40年の間で変化が少ない。

##### b) 将来の修学旅行の姿に関して

ここでは、学習指導要領の制約を受けない範囲で教員が修学旅行に何を求めているかを探る。『修学旅行の手びき』が出版されてから20年以上が経過した1981年に、日本修学旅行協会は、21世紀に向けての修学旅行がどのようなものになるのか予想するアンケートを実施した。回答者は、日頃から修学旅行に直接・間接に関与していた全国の教育委員会関係者や中学校・高校の教員104人で、生徒は含まれていない。回答の傾向から、当時の修学旅行を教育関係者がどうとらえていたかを探りたい。

「修学旅行不要論が散見されますが、ご自身の体験やご子弟等の実際を見聞きして10年後、20年後の修学旅行はどのようなことが望ましいでしょうか。」という質問に対し、回答者に最大三つまで選ぶ複数回答で答えてもらったところ、結果は表-3の通りとなった。

「観光旅行は好ましくない」「自主行動を重んずべき」「体験学習を主とすべき」といった、明治時代の修学旅行に近い考え方を1980年代にも望んでいたことが分かつ

た。文部省の意識は『修学旅行の手びき』のように管理主義を強める形に変化しても、現場の教員などは従来の思想を抱いていた可能性がある。

このアンケートでは、自由回答欄で意見を募集していた。修学旅行の形態についても意見があり、生徒自身の主体性が向上するという予想もあった。以下は、その予想の一部である。

- ・グループ活動が主流になる(同意見4件)
- ・生徒が行程、経費も含め、主体的に計画、行動するものになろう。全学年一斉スタイルは変わっていくだろう(同意見4件)
- ・旅行業者主導型からの脱却、他校がやるからという付和雷同型を改める(同意見3件)

先述の選択式回答の結果と同様、生徒の主体性を期待する声は存在した。

##### c) 修学旅行の効果と目標達成度に関して

上記のアンケートとほぼ同時(1980年)に高校教員952人を対象として日本修学旅行協会が実施したアンケートは、教員が考える修学旅行の教育的効果と目標達成度を調査している。

「教育旅行の効果は何か」という質問に対し教員側は、①高校生活の楽しさを強く印象づけることができた

表-3 10年後・20年後の望ましい修学旅行(日本修学旅行協会『創立30周年記念出版修学旅行のすべて1981年』)(全国の教育委員会関係者・中学校および高校の教員104人を対象として調査)

順位	選択肢	回答数	占有率(%)
1	規律正しい団体訓練を強化してほしい	53	22.4
2	生徒同士、生徒と教師間のコミュニケーションを主とすべきである	51	21.6
3	物見遊山的な観光旅行は好ましくない	38	16.1
4	旅行形態は一斉周遊旅行よりもグループによる自主行動を重んずべきである	37	15.7
5	スポーツ、実習などの体験学習を主とすべきである	29	12.3
6	現在のままでよい	9	3.8
7	もっと海外への修学旅行を行って見聞を広めるべきである	8	3.4
7	関西(京都・奈良)旅行は是非実施すべきである	8	3.4
9	旅行の自由にできる時代に、学校主導の団体旅行は不要である	3	1.3

(72%) ②旅行を通じて教師と生徒・級友関係など好ましい人間関係を深め、理解させることができる (65%) ③計画実施に生徒を参加させることによって自主判断力・行動力をつけさせることができる (62%) ——と答えている。

他方「現状における目標達成度」は、①十分に達成した (2%) ②7.8分どおり達成した (20%) ③なかばである (56%) ④ほとんど達成しない (32%) ——と、思うように修学旅行を活かせなかったと感じる教師も相当数いることが分かる (日本修学旅行協会,1981)

自分たちの世代で達成できなかったことを、未来の世代に期待していたが故に、「21世紀の修学旅行」で自主性を要求する回答が目立ったとみることもできよう。

### 3 『自己練磨』型の教育旅行に関する諸考察

#### (1) 修学旅行・教育旅行の起源について

修学旅行という形で、旅特有の効果と考えられる『自己練磨』を期待して旅行が教育に導入され、日本では今日まで修学旅行が実施され続けている。ここで、修学旅行あるいは民間学校や遠足を含めて教育旅行は、そもそも何を起源として始まったのかを探求する。加えて、最初の教育旅行と近現代の修学旅行との同一点・相違点なども比較・考察する。

日本の修学旅行は、ドイツのそれを参考としたものだった。だが、そのドイツの修学旅行よりも先に教育の目的を持って旅に出た例として、イギリスで18世紀ごろに実施されたグランドツアーが存在した。この節では、グランドツアーに関する考察とグランドツアーについて言及した上で広く旅と教育の関係を述べたジョン・ロックの『教育論』についての考察を行う。

#### a) グランドツアーと修学旅行

##### ① グランドツアーの概要

17世紀中頃から19世紀初頭にかけて、イギリスでは「グランドツアー」と呼ばれる旅行が盛んだった。イギリス貴族の御曹司が、ヨーロッパ各地の主要都市の文化や上流社会を経験するために参加した。主に文化的先進国であるフランスやイタリアを訪問していた。

Jenkins (2009) はその目的や内容を以下のように定義している

- ・参加した若者の精神発達を促し、世界に関する見聞を広めさせる。
- ・英国内にとどまった人々の為に、ツアーに参加して発見したことを報告する義務を負う。
- ・芸術や考古学、そして彫刻術を学ぶ。

文化の最先端を実際に見聞きする「生の体験」が、ここでも重視されていた。

大学への進学や就職の前に欧州大陸への旅に出かけた理由として、当時の貴族が抱いていた大学への失望が挙げられる。本城 (1983) は「十八世紀中葉のオクスフォード並びにケンブリッジ両大学の知的レベルというものがいかに低かったかということは、当時の記録にあまねく残されている」 (p.6) としている。

長期の滞在である上、貴族としての対面もあり、旅費は高額なものだった。参加できるのが上流階級に限られていたほか、上流階級の子息でも全てを体験するのは長男だけで、次男以下は大学の長期休暇において数カ月間だけ旅をするにとどまった場合も多かった。

##### ② 修学旅行との比較

グランドツアーを修学旅行 (特に『独国ノ修学旅行』で示されているもの) と比較すると、共通点と相違点をいくつか発見できる。

共通点としては

- ・直接の見聞 (生の体験) を目的としていること。
- ・旅でしか経験できない内容を中心とすること。

相違点としては

- ・学校ではなく個人が主催すること。
- ・全校生徒が参加することはなく、費用を負担できる一部の者だけが参加すること。
- ・期間が数カ月～数年と長いこと。

まず相違点から検討すれば、グランドツアーは貴族階級の個人の能力を飛躍的に伸ばすことを志向していたものと考えられる。限られたエリートを、集中的に教育する形になるからである。

一方の共通点を考察すると、やはり旅を教育において重視していたことが分かる。特にグランドツアーの場合は学校教育への不満感が旅の動機の一つであった。大学では経験できない学びが旅には存在するという意識を有し、多くの若者は大学よりも旅を選択した。旅に参加する学生から見れば貴重な時間を旅に費やしたことから、少なくとも大学に行くよりは旅に価値が存在しなければならず、教育的意義に関する重要度は一層高かったものと思われる。

#### b) ジョン・ロックの『教育論』との関係性

イギリスの哲学者ジョン・ロック (John Locke) は著書『教育論』の中で、旅行が持つ教育的効果について考察した。

「教育の仕上げは普通は旅行である。これで教育の仕事は終り、一人前の紳士ができると一般には考えられている。私としては外国に旅行すれば大きな利益があることを認める。」 (p.248)

「先ず第一は言葉であり、第二はひとびとを観察し、またそれぞれにちがった、とくに同じ教区や近所の人たちとはちがった気質や習慣や生き方のひとびとと交際することによって、知識と分別とを発達させるという点で

ある。」(p.248)

「人間が知識を獲得するのは非常な熟練を要するものであって(中略)旅行することによって時には眼を開き、注意深く慎重になり、物事の上っつらだけを見ないような習慣をつけ、礼儀正しいいんぎんな態度をほどよく保って、外国人やまたあらゆる種類の人たちと自由に安全に交際してその行為ある評価を失うことがない、という風にならなければ海外旅行をしてもほとんどむだである。」(p.250)

「もはや一人前と見られる若い紳士でしかも異邦人が、その土地の習慣や作法や法律や政治について教えてほしいという希望を示せば、至る所で最もすぐれた知識豊かな人たちから心からの援助ともてなしとをうけるだろう。この人たちは素直な研究心旺盛な外国人ならよるこんで受け入れ、激励し、好意を示してくれるであろう。」(p.251)

これらの文章は、当時イギリスで盛んだったグランドツアーを意識しているものと思われる。確かに、旅が教育的効果を発揮するとロックも述べている。

ただし、ロックは旅が教育において効果を発揮するには、適切な指導者が必要だと注意している。

「紳士たるべき青年を外国に旅行させるのに最適と思われる時期は、よく面倒を見てくれる教師の指導下にある比較的若い時期か、あるいはもう少し大きくなって保護者がついていなくても良い時期であろう。この時期になれば自分を支配することもできるし、外国で注目し値すると思われる事や帰還後役立つような事柄に出会ったら観察することもできるし、それに自分の国の法律や風習や、また自然や道徳の長所短所を知りつくしているの、外国で何らかの知識を得たいと思って交際する相手の人たちと交換するようなものを自分でも持っているわけである。」(p.248)

「保護者から守られ、またそれにかこつけて、自分の足で立つ必要はないとか、自分の行動に責任をもたなくても良いとか考えれば、苦勞して研究したり自分ですずんで有益な観察を試みるというようなことは先ずしないものである。彼らの考えは遊ぶことや楽しむことではないである。そういったものは制約される点でありなっていないからである。そして自分の会う人たちに対してどう振舞ったら良いかを知るために、その人達の意図するところを検討し、応待ぶりを観察し、その学問や気質や傾向などを観察するという努力を払うことをあまりしない。そういうわけで彼と一緒に旅行する人は彼のついたてになってやらなければならないし、いばらの中に踏み込んだ時には救い出してやり、どんな失さくに対しても責任をもってやらなければならない。」(p.250)

上記の文章から読み取れることを要約すれば、「本来

は自分で苦勞して研究し、有益な観察を試みるべき」「それができないため、指導者が必要となる」ということだろう。これらは、修学旅行の目的において「自分で何とかする能力」を重要だと捉え、「教員の手助けは必要に応じて」という姿勢をとる明治期の文部省が抱いていた思想と相通じるものがある。

## (2) 古来の日本の旅と『自己練磨型』旅行の共通性について

修学旅行に関して言えば、「判断力」や「生の体験」は戦後に重要度が低下した。だが、旅において当時でもこれらを重視した者は存在した。

例えば、民俗学者の宮本常一が挙げられる。宮本は「人はなぜ旅をするか」について、以下のように推察している。

宮本(1975)によると『かわいい子には、旅をさせよ親御。憂いも辛いも旅で知る』という古くからの諺でも判るとおり、社会的訓練のため、世間を見ていないことを恥としたことと、日本人は好奇心が強かったこと、並びに旅ができる社会的環境があったことがキーフクターであったものと述べられている。即ち、「日本の場合には民族がひとつであり、方言の違いはあってもコミュニケーションは十分果たせし、さらに階層はあったが階級はなかった、血がひとつであった。それで仲間意識が強く旅を容易にさせたのである。」(宮本,1975,p.48)

「世間を知らん娘は嫁にもらい手がのうての、あれは竈の前行儀しか知らんちうて…世間をしておらんとどうしても考えが狭まうなりますけのう」(宮本,1960,p.82)

「せまい世界、せまい家の中にとじこもっていたのは人生勉強にはならない。人生勉強するためには旅をして来ることだ。今一つ旅は苦勞の多いものであり、人の情にすがらねばできぬものである。その旅によって、自分のいままでおかれた世界や観念をつきくずしてもっと広いものが得られると考えたのである。」(宮本,1975,p.123)

主として旅によって見知らぬ現象を直接経験する、つまり「生の体験」を経ることで人間としての成長を求めるという意義を見出している点では、『独国ノ修学旅行』の意識と共通している。特に、宮本は「苦勞」という語をしばしば旅の言及に用いている。「自分の根拠とする所を離れて、まず見知らぬところをあらくのが第一条件であり、二回、三回行くにしてもその旅には、苦痛のものなような条件がなければならない。」(宮本,1975,p.64)という記述も見られ、それなりの「苦しみ」を含んでこそ旅に出る意味があると宮本は考えていたことが分かる。

宮本による古来の旅に関する言及から考察すると、旅における『自己練磨』という概念は海外からの輸入では



旅に出る若者が多い。ドイツでも調査の結果、現在も日本同様に修学旅行が実施されている。これら二つが持つ意義について、この節では紹介する。

#### a) 現代の『自己練磨型』旅行の例1—ギャップイヤー

グランドツアーは金銭的に余裕のある貴族の子息に限られていたが、現在のイギリスではもっと幅広い層の若者が長期間の旅に出ている。ギャップイヤーと呼ばれるものだ。

砂田 (2013) によると、ギャップイヤーは1960年代に英国で認知されるようになった慣行だ。1990年代には、とりわけベルリンの壁崩壊以降にイギリスの学生が安価に海外へ渡航できるようになってから一般的な行事となった。元々は大学への入学資格を得ている若者が、入学を延期して親元離れた非日常の環境下で、長期間にわたり旅やボランティア、課外活動としての国内外留学などの社会体験や、インターンシップ・アルバイトの就業体験などを行うものだった。日本語で言うところの「かわいい子には旅をさせよ」ということわざのイメージや価値観に近いと砂田は説明する。期間はおおむね3か月から2年の間で、取得時期も大学入学前から入学後の学部時代の休学のほか、卒業路のスキルアップや能力開発も概念として適用されるようになった。18~25歳くらいをおおよそ対象としている。イギリスでの参加者は、毎年高校卒業生の約10%にのぼる (井本,2013)。

南アフリカのAfrican Leadership Academy は、2004年からギャップイヤーの制度を設けて各国から学生を受け入れているが、ギャップイヤーで身につく能力の可能性として以下の10個の資質を列記している (砂田,2012)。

- International Perspective 国際的視野
- Decision-making 意思決定力
- Relationship-building 関係性構築力
- Problem-solving and Resourcefulness 問題解決能力と工夫
- Communication, especially across cultures 異文化コミュニケーション
- Organization and Responsibility 組織力と責任力
- Teamwork and Flexibility チームワークと柔軟性
- Maturity and Self-Awareness 成熟と自覚
- Independence and Self-Confidence 独立性と自信
- Language Fluency 言語能力

これらは、個人か団体かの違いこそあれ、修学旅行で得ようとする能力と近いところがある。修学旅行の場合は短期間だが、ギャップイヤーではおおよそ1年間にわたって経験を積むことができるため、より効果は大きいものと思われる。

ギャップイヤーのさらなる目的の一つに、本業を離れじっくり心身を休ませることがあると砂田 (2013) は述べる。ハーバード大学も、高校時代まで学業に専心していた入学生にギャップイヤーでリセットを勧めるが、そ

れはいわゆる燃え尽き症候群や中退率の低下機能をギャップタームの中に認めているからだという。

職業に就いてからも、ギャップイヤーで得た経験による効能がある。イギリス最大のボランティア推進団体、Community Service Volunteer の調査によれば、有益なギャップイヤーを経験した学生は職場での意志決定やコミュニケーション能力、対人関係構築において優れていると雇用関係者の88%が判断している。かつ、ボランティア活動などさまざまなスキルを獲得した学生は職場での昇進も早いと人事関係者の79%が認めている (大橋,2009)。

#### b) 現代の『自己練磨型』旅行の例2—ドイツにおける現在の修学旅行

『独国ノ修学旅行』で文部省から絶賛されたドイツの修学旅行に関して、現在の状況を探る。

若者の旅行離れが見られる日本とは反対に、ドイツに関しては2008年度のドイツ旅行業協会の調査によると若者の旅行が毎年2~3%微増している。若者に限らず、全人口の出国率に関しては日本が13%台と低い一方でドイツは93%にのぼる。国境が陸続きで、出入国に際する手続きなどの煩雑さに差があるとはいえ、それだけを理由とすることはできない程度の差である。若者と海外旅行の関係は、経済環境ではなく、家庭教育や学校教育、国の制度の問題に起因すると考えることもできよう。(大島,2011)

そこで、ドイツ連邦共和国大使館 (ドイツ大使館) の職員に、国または地方の現状などを取材した。その結果、ドイツのほぼ全ての州・学校で修学旅行が実施されており、「歴史学習や地学学習など、通常の教室での学習の延長」「生徒が自分で判断する練習」「思い出づくり」の三つは現在の修学旅行でも目的としていると言えるという回答を得た。

この回答から、ドイツでは『自己鍛錬』という初代の修学旅行が意識していた部分を今もなお重視しているといえる。

#### (5) 近年の我が国における『自己練磨型』旅行の状況

『自己練磨型』旅行が縮小の傾向にあった昭和時代を過ぎて、ごく近年では一部の若者が再び「判断力」「生の体験」を重視する旅を実施している。その理由の一つには、2000年の学習指導要領改定で取り入れられた総合学習の存在が考えられる。この節では、総合学習と修学旅行の関連を探り、その結果若者の旅にどのような影響が生じたかを分析する。加えて、現代の若者で『自己練磨』を含んだ旅を実施した者による旅の記述も考察する。

##### a) 総合学習と修学旅行

###### ① 総合学習の概要

ゆとり教育が始まる少し前である2000年、学習指導要領が適用される全ての学校で、総合的な学習の時間が導

入された。

この時間の目的は、2011年から施行された新学習指導要領で以下のように定められている。

「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」（中学校学習指導要領第4章第1）

小学校・高校などの学習指導要領でも、若干の違いこそあるものの、同様の定義がなされている。

学習指導要領の解説書でも、文部科学省は総合学習について「第1の基本は、学び手としての生徒の有能さを引き出し、生徒の発想を大切に育てる主体的、創造的な学習活動を展開すること」と明言した上で、生徒の主体性を重視するように指導している。他にも、解説書には以下のように記述されている。

「生徒は本来、知的好奇心に富み、自ら課題を見付け、自ら学ぶ存在である。生徒は、具体的な事実に直面したり様々な情報を得たりする中で、対象に強い興味や関心をもつ。また、実際に体験したり、調査したりして、繰り返し対象に働きかけることで、対象への思いを膨らませていく。」（文部科学省,2008,p.93）

「生徒は未知の世界を自らの力で切り開く有能な存在である。興味ある事象についての学習活動に取り組む生徒は、納得するまで課題を追究し、本気になって考え続ける。この学習の過程において、生徒は自ら課題を解決するための知識や技能を身に付け、それらを活用する力をはぐくんでいく。」（p.93）

ここに記述されている内容は、『独国ノ修学旅行』にあるに『自己鍛錬』の理念に近い。生徒に主体的な判断力を身につけさせることを目的とし、これまでの経験などから得た能力を活かして課題を解決する力の育成を目指している。

解説書には、総合的な学習にふさわしい教材の特徴も挙げられている。

「一つには、（中略）直接体験をしたり繰り返しかかわったりすることのできる具体的な教材であることである。総合的な学習の時間は、体験活動を行うことが重要であり、そうした中で行われる全身を使った対象の把握と情報の収集が欠かせない。間接的な体験による二次情報も必要ではあるが、実物に触れたり、実際に行ったりする直接体験が優先される。」（p.94）

「二つには、生徒の学習活動が豊かに広がり、発展していく教材であることである。一つの対象から、次々と学習活動が展開し、自然事象や社会事象へと多様に広がり、学習の深まりが生まれることが大切である。また、

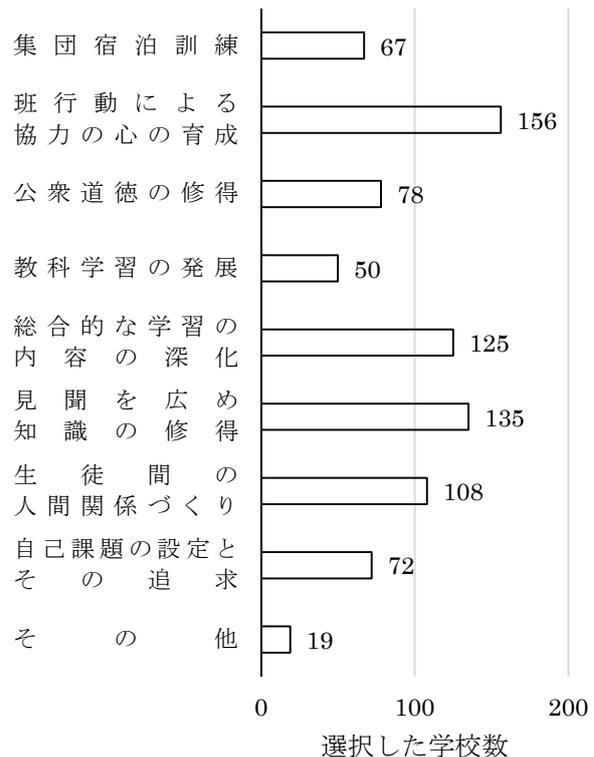


図-1 修学旅行のねらい（全国修学旅行研究協会『「総合的な学習の時間」の観点からとらえた修学旅行<調査報告書>』）（全国の中学校260校を対象に調査）

生活の中にある教材であっても、そこから広い世界が見えてくるなど、身近な事象から現代社会の課題等に発展していくことが期待される。」（p.94）

「実際に」触れたり行ったりする直接体験には、教育上の意義において旅が持つ優位性が大いに役立つ。

## ② 修学旅行との関連性

修学旅行で学ぶ・感じることそのものが総合的な学習になると共に、旅行の前に訪問先の文化などを調査する事前学習、旅行が終わってから旅先で学んだことを文章にまとめたり発表したりする事後学習なども、総合的な学習に含まれる。

そうした、修学旅行と総合的な学習の関係を全国修学旅行研究協会（2002）が調査しているので、分析してみたい。全国の中学校4000校余りにEメールで質問を発信し、260校から返信を得てまとめたものである。

修学旅行のねらいについて、「総合的な学習の内容の深化」という選択項目を含んで、計9つの選択肢から複数回答で選ばせている（図-1）。

「見聞を広め、知識の修得」という「修学旅行本来の意義」（全国修学旅行研究協会,2002）の次に、「総合的な学習の内容の深化」を挙げた学校が多い。修学旅行が意図する意義と、総合的な学習が目指す効果が、それなりに整合しているものと認識されているのだろう。

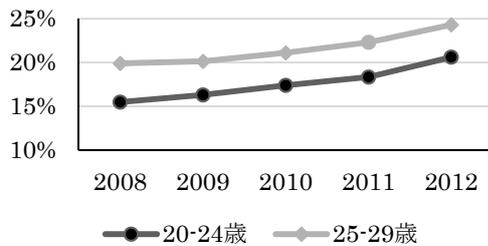


図-2 2010年前後の若者の出国率（法務省「出入国管理統計統計表」と総務省「人口推計」「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査」より筆者作成）

修学旅行と総合的な学習の時間の関わり方で、実際に「意識した」「部分的に意識した」かどうか尋ねたところ、「意識した」「部分的に意識した」を合わせると84.5%にのぼった（全国修学旅行研究協会,2002）。

#### ④ 2010年代の若者における出国率の推移

図-2に、総合学習を経験して2008年以降に20歳に達した世代の出国率の推移をまとめた。出国率を基準として確認すると、ごく近年の若者は旅に出始めていることが分かる。

#### b) 近年の若者の『自己練磨』旅行の事例

近年の若者の中にも、作り上げられたツアーではなく自分で一から挑戦する旅を求める人がある。

例えば石田（2007）は世界を自転車で一周したときの記録を残しているが、そこには以下のように、旅の前後で性格が大きく変化したという記述が存在する。

「ひとしきりしゃべったあと、みんなに手を振ってそこを離れた。歩いていると、また涙が出てきた。（中略）どういうわけか、ぼくはアフリカにいるあいだ、よく涙を流した。（中略）すべてが独特の透明感に包まれていた。（中略）涙するたびに、ぼく自身がほんの少しずつ透明になれるような気がした。」（p.247-248）

「（原住民に襲われるかどうか分からない中で）自分の前にあるのは、一本のレールなんかじゃない。未知は無数に枝分かれして広がっているのだ。どこへ向かうかは自分したいなのだ。『なんとかなるだろう』じゃだめだ。運命に翻弄されてはいけない。運命に操られてはいけない……。」（p.255）

「運命に対して自ら動いた。あの状況で動けるか動けないか、もし結果が同じだったとしても、そこには決定的な違いがある。旅に出る前のぼくなら動けなかった。いや、動けなかった……。」（p.256）

「自転車世界一周という旅は、出発前こそ大冒険だと思っていたが、いざ始めてみるとその印象はしだいに消えていった。（中略）不吉なイメージを覆して、生きて帰ってきたことは、ぼくにとってとても意味のあること

だった。自分という存在の根底に、大きな”力”が築かれたような感覚がある。」（p.307）

「悪いことはなぜか重なっておしよせてくるものだが、その悪循環からどうやって抜け出すかは、この力にかかってくるように思う。その力が、経験という大きな”財産”を通してつちかわれた。」（p.307-308）

「一番スゴイものを見たくて、感じたくて、旅をしてきた。それは、自分が生きてきた手ごたえのようなものだ。有名な景勝地や歴史ある大聖堂でもなく、自分の記憶に焼きつき、燦然と輝きを放ち、振り返るごとに体内から熱くしてくれるシーン——それは、ギニアの青い森や、シルクロードの流れる褐色の大地。それらのシーンは、いつだってぼくを奮い立たせてくれている。」（p.308-309）

「生の体験」「判断力」というキーワードでここまで本研究を進めてきたが、それらから導かれる本当の旅の意義は「変化」を自らの中に求めることも考えられる。

また、宮本同様に「苦勞」によってももの見方が変わる、あるいは「苦勞」という「生の体験」を経てこそ本当の美しさを理解できると石田はいう。

「カヌーのレンタル会社が企画している一日や二日の体験ツアーをやったとしても、いまぼくたちが感じているものとはずいぶん違っただろう。何日も河に揺られ、河原でキャンプし、河から得られる恵みを食べ、水の音を聞きながら眠る。そうやって初めて、河が体のなかを流れ始めるのだ。」（p.47）

## 4. まとめ

本研究では、修学旅行に関する文献の調査を通じて、修学旅行や教育旅行が有する意義の変遷をたどった。

明治期に修学旅行が創設されたころには、古来から日本に暗然的に存在していた『自己練磨』の理念を明文化した上で、各学校に対して「判断力」や「生の体験」を求めていたことが分かった。

この理念は古来の日本のみならず、イギリスやドイツといった国においても、遅くとも17世紀ごろから修学旅行・教育旅行に取り入れられていたことが分かっている。

これらの国々ではその後も『自己練磨』の理念が継続しているが、日本においては管理教育が台頭するにつれて理念が縮小してしまったことが判明した。その縮小の結果、現場で修学旅行を実施する教員からも、生徒の自主性を要望する意見が見受けられるようになった。

平成に入ってから学習指導要領そのものには、依然として『自己練磨』を必要とするという条文は存在していない。ただ、2000年以降は総合学習を通じて改めて「判断力」「生の体験」を重視する修学旅行が復活しつ

つあることも確認できた。加えて、中には個人で実施する旅行においても自分自身で内容を計画して自分しか頼れない状況で道を進める旅を実行した人も存在し、若者の旅全般に関して、近年では『自己練磨』が再び求められつつあることが判明した。逆に、『自己練磨型旅行』を経験した世代は旅への欲求が増加していることも示唆された。

**謝辞：**日本修学旅行協会の野口正太郎様を始めとする職員の皆様からは、修学旅行の歴史と現状を把握するための資料を数多くご提供いただいた。また本研究を始めるに当たっては、まず世界各地での教育旅行の現状を知るためにインタビュー調査を実施したが、その際には東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻留学生事務室の利根川ますみ様・三輪朝様ほか、同専攻所属の留学生諸氏32人（17カ国）、ウィーン工科大学柴山多佳児博士、東京大学先端科学技術研究センターのChristian DIMMER助教、フランス政府留学局日本支局の山中冨ゆ子様、ドイツ大使館の新藤真理様はじめ職員の皆様など、たくさんの方々のご協力くださった。さらに東洋大学大学院国際地域学研究科国際観光学専攻の矢ヶ崎紀子准教授には、観光に関する諸外国と日本の相違点など紹介いただいた上、研究全般を通しての方向性についてもご相談をお願いした。改めてここに、感謝の意を表したい。

#### 参考文献

- 石田ゆうすけ（2007）『行かずに死ねるか！世界9万5000km自転車ひとり旅』幻冬舎
- 大橋良子（2009）「ギャップ・イヤーの要約」秦由美子編「英国におけるギャップ・イヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取り組みに関する調査研究」最終報告書 p.32-36
- Jenkins, M.（2009）「ギャップ・イヤー：概説」秦由美子編「英国におけるギャップ・イヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取り組みに関する調査研究」最終報告書 p.26-31
- 砂田薫（2012）「ギャップイヤー導入による国際競争力を持つ人材の育成」日本学生支援機構『ウェブマガジン『留学交流』』Vol.12
- 砂田薫（2013）「ギャップイヤーの定義」『ギャップイヤー白書』編集委員会『「ギャップイヤー白書」2013』全国修学旅行研究協会（2002）『「総合的な学習の時間」の観点からとらえた修学旅行＜調査報告書＞』
- 田中佑典（2012）「旅が人づくりにおいて持つ意義とその時代変遷に関する研究～古典的宗教や思想・近代西欧教育思想・青年育成思想を対象に～」東京大学大学院工学系研究科修士論文（未公開）
- 新田義之（2006）『澤柳政太郎随時随所楽シマザルナシ』

ミネルヴァ書房

- 日本修学旅行協会（1969）『臨時増刊修学旅行通巻152号』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（1981）『創立30周年記念出版修学旅行のすべて1981年』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（1985）『修学旅行のすべて1985（昭和六十年）Vol.4』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（1990）『修学旅行のすべて1990（平成二年）Vol.9』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（1995）『修学旅行のすべて1995（平成七年）Vol.14』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（2000）『修学旅行のすべて2000（平成十二年）Vol.19』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（2005）『修学旅行のすべて2005（平成十七年）Vol.24』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（2006）『データブック教育旅行白書2006年版』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（2007）『データブック教育旅行白書2007年版』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（2008）『データブック教育旅行白書2008年版』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（2009）『データブック教育旅行白書2009年版』日本修学旅行協会
- 日本修学旅行協会（2012）『教育旅行年報データブック2012』日本修学旅行協会
- D.J.Boorstin（1962）THE IMAGE（星野郁美訳『幻影の時代』東京創元社、1964年）
- 平凡社（1988）『世界大百科事典1988年版11』平凡社
- 本城靖久（1983）『グランド・ツアー』中央公論社
- 宮本常一（1960）『忘れられた日本人』未來社
- 宮本常一（1975）『旅と観光』未來社
- 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』文部科学省
- 文部省（1900）『独国ノ修学旅行』文部省
- 文部省（1956）『修学旅行の手びき』東洋館出版社
- J., Locke（1693）Some thoughts concerning education（梅崎光生訳『教育論』（世界教育学選集）明治図書出版、1960年）